

いきものと  
生きる

五箇公一



最近マダニという吸血性のダニにかまれた人が病気になるって死に至るといふニュースを目にする機会が増えてきている。特に「重症熱性血小板減少症候群(SFTS)」と言われるウイルス性の新興感染症の患者数が2012年以降増え続けている。これまでに500人近い患者が報告されており、うち70人が死亡している。単純計算で死亡率14%という、極めて致死率の高い感染症と言える。

マダニはSFTS以外にも、「日本紅斑熱」や「ダニ媒介性脳炎」という重症化リスクの高いウイルス感染症を媒介する。これらの病気による患者数も最近、増加傾向にあることが示唆されている。その背景に人間とマダニの遭遇確率が高まっている

## 野山に潜むマダニにご用心

可能性が考えられる。

ダニ学者の自分もさすがにマダニは可愛いとは言いがたく、やはり怖い存在である。野外で調査するときも、防虫スプレーを足元にしっかり散布して、マダニを寄せ付けないように心がけている。

そんな自分も一度、がっつりとマダニに吸血されてしまったことがある。今の研究所に入所して間もない頃、まだそんなにマダニの怖さも知らず、何の防虫対策も取らずに北海道へ葉に寄生する「ハダニ」の採集調査



ニュージーランドの動物園で売っていたマダニのおもちゃ。ピンを接着して、ピンバッジとして愛用している。五箇公一さん提供

に行った時のことである。

クマザサの藪の中でハダニを探し回り、採集して、その日のうちに飛行機に乗って東京に帰還。翌日から茨城県つくば市の研究所で仕事をしていたある日、何だか背中中の腰のあたりがむずむずしたので手でかいてみたら、指にべったりと血が付着していた。「やられた! マダニだ!」とこっさに判断できた。

北海道にはダニ媒介脳炎ウイルスが存在する。感染したらえらいことだ。慌てて皮膚科の診療所に行って傷口を見てもらうことに。ところが担当医が「えーっと」と言いながら「書虫大図鑑」みたいな本を引っ張り出して検索を始めたもんだから、

たまらず「マダニ」というのはこういうダニで、だから傷口に口器が残っていないか、傷口が広がっていないか確認してくれ!」とまくし立ててしまった。

担当医が「ダニに詳しいんですね。ダニの先生ですか?」と目を丸くして聞いてきたので、すかさず「そうです、ダニの先生

です! だからいう通りに処置してください!」と言いつ返した。

結局傷口に異常はなく、消毒して経過観察することに。窓口で会計を済ませ、領収書に「診察料」と書かれているのを見て、思わず「診察したのはオレだろ……!」とつぶやいてしまった。

その後、特に体調に異常は起きず、感染は免れた。マダニがウイルスを保有している確率は極めて低く、マダニにかまれたからといって即病気になるわけではない。ただ油断はできない。特效薬はないため、感染して重症化すれば命に関わる。街中の医師のなかにはマダニを見たこともないという人も多く、診察が滞るケースも考えられる。

間も無く春の行楽シーズンがやってくるが、皆さんも野山に遊びに行かれる際には、しっかりと防虫対策をしようで自然を楽しんでいただければと思う。

(国立環境研究所生生物・生態系環境研究センター生熊リスク評価・対策研究室長)

次回は3月25日掲載